



福井大学教育学部
附属義務教育学校

№.06

令和元年12月5日

学校だより

第2回教育研究集会

後期課程 副校長 永廣 裕子

11月22日(金)に、県内外、海外から500名を超える参観者が来校する中、義務教育学校になって2回目の教育研究集会を開催することができました。育友会の皆様には、駐車場整理、荷物預かり、誘導、来賓接待、受付や書籍販売、弁当引き渡し等のボランティアを引き受けていただき、ありがとうございました。心より御礼申し上げます。

研究主題「自律的な学びへのイノベーション 探究するコミュニティを培う」のもと、今年度は研究副題を「学びのつながりを紡ぎ、社会を創る力をとらえる」とし、研究の成果を発表しました。午前中は、児童・生徒による社会創生プロジェクトの発表と各教科の公開授業、午後からは各教科毎の分科会とシンポジウムが行われました。

まず、午前中の児童・生徒発表では、1年生がテーマ「なかよしプロジェクト～学校をもっとすきになろう～」のもと、先生にインタビューして分かったことや観察したことをポスターにまとめ発表しました。2年生はテーマが「1年生を笑顔にしようプロジェクト」で、2年間の歩みと、その中で一番思い出に残っている活動について発表しました。6年生は、テーマ「未来を創るまちづくりプロジェクト」で探究してきた学びを参観者と語りました。堂々とした対応に、参加した方も大変感心していました。後期課程では、各学年、生徒会、音楽委員会、FLIA(生徒による自主活動組織)、シンガポール研修など8項目のポスターセッションを行いました。学校生活の様々な場面で進められているプロジェクト型学習の歩みを発表することができました。一方通行ではなく、対話を大切にして、参加して下さった方から対等な立場で質問やアドバイスをいただき、学びの多い時間となりました。



7年生実行委員による発表

次に、前期課程、後期課程の順に授業を公開しました。探究テーマのもと、仲間と協働で解明していく授業が、それぞれの教室で公開されました。



6年生の社会科の授業

午後の全体会では、東京大学大学院の秋田喜代美先生、同じく東京大学高大接続研究開発センターの白水始先生、福井大学教職大学院の木村優先生、本校教員の柳博恵研究主任によるシンポジウムが行われました。秋田先生には20年以上前から本校の研究に関わっていただいています。公開された授業や発表を例にしながら、子どもの主体性を重視した授業の大切さ、21世紀を生き抜く子どもたちのためにはどのような教育が求められているのかについて、わかりやすく語っていただきました。



午後のシンポジウムの様子

【全体を通して】

○授業デザインのヒントを多く得ることができました。資質能力の育成をどう捉え、目の前の子どもたちにどうなって欲しいのか、学校全体で共有することの重要性がよくわかりました。

- 多くの大学生が参加されていて、質の高い教員養成につながると感じ、素晴らしい試みだと思いました。
- 附属の児童、生徒と言えど、やはり発達段階に応じた課題があるのは一般の子どもたちと変わらないと感じました。一方、9ヶ年を見据えた教育の成果は上級生ほどよく体現されていることも感じました。
- 単なる言葉の羅列ではなく、生徒の実態を踏まえ、将来に向けての研究だと感じました。
- 保護者の方のおもてなしと心遣いを感じました。みんなでつくり上げているのが伝わり、大変温かく感じました。ありがとうございました。

【児童・生徒発表】

- 堂々とポスターセッションに臨む子どもたちの姿、表現力、今後が楽しみです。
- 6年生の発表は、子どもたちがあの環境に物怖じせず、しっかりと話している姿に驚きました。後期課程になってどんな姿に成長しているのかを見てみたいと思いました。
- 一人一人が、自信を持って表現している姿に日頃の取組の成果を感じました。児童と生徒が同時に発表する様子が教育の一体感を感じました。
- 9年間を通した学びのプロセスがどれだけ身に付いているか、どれだけ必要なものかを見て感じる事ができました。
- 1、2年生の低学年の児童が堂々と相手を意識して発表している姿を見て、改めて子どもの可能性を感じました。また9年生の発表でも自分の考え、身に付いた資質能力を積極的に発表されていました。この姿のイメージを私どもの学校の9年生にも当てはめて、さらに力を身に付けたいと思います。

【参観授業】

- 「学ぶ」より「学び合うことが楽しい」そんな姿がありました。発言しない生徒にもおそらく内なる学びがあったのだろうと感じました。
- 子どもたちの思考に寄り添うようにカリキュラムを編成し、子どもたちの声をとて大切にされている姿が印象的でした。私たちの学校での教えのサイクルよりも圧倒的に未知数だし、時間的なコントロールも難しいと思いますが、探究サイクルで子どものワクワクを止めない授業にトライしてみたいというような気持ちになりました。
- 探究を重ねていくことで児童、生徒が意欲的に授業に取り組んでいると感じました。子どもたちに自由に発言させたり活動させたりするだけでなく教師が意図を持ち、生徒の学びになるように配慮されており参考になりました。
- 子どもの自由な発想、想定外の発言をそれぞれ把握し、学習活動として成立させるのは教師の力量が問われる授業方法ですが、反面、子どもからの活力を感じ教師の醍醐味を味わうことのできる素晴らしい授業方法です。今日はそんな、子どもや教師の姿を見せていただき大変幸せな気持ちになりました。
- 生徒の発言から課題を見出し、授業の展開に繋がられている。話し合いの場面でも、相手の意見を認めながら「でも～」と、批判的な意見も出せる。また、それに対して意見を言えるという子ども同士の対話のすごさを見させていただきました。先生もファシリテータとして子どもの発言をうまくつないでいるのが非常に参考になりました。

さて、2019年5月に OECD（経済協力開発機構）が、「OECD Learning Compass 2030（OECD 学びの羅針盤 2030）」を公表しました。ここで重視されている概念が“Student Agency（生徒エージェンシー）”です。Agency とは、「主体的に考え、行動し、責任をもち社会変革を実現していく」という意志や姿勢を意味しています。また、よりよい未来の創造に向けた変革を起こす力として、「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマに対処する力」「責任ある行動をとる力」の3つを挙げています。

本校では、義務教育学校となる20年以上前から「探究」と「コミュニケーション」を大切に協働探究に取り組んできました。協働でよりよいものを創り上げていく力は、子どもたちが大人になって活躍するであろう30年後の未来の創造に向けて、変革を起こす力を培っているともいえるのではないのでしょうか。

しかしながら、本校にもまだまだ課題はあります。子どもたちは想像することは得意としていても、現状や実態を見て問題点を探し、自ら実行する力、貢献しようとする力はまだまだ十分とはいえません。今後、時代が急速に変化しても、時代に左右されない人として大切なこと、思いやる気持ち、礼儀、挨拶、奉仕の精神などの人間力も、これまで以上に丁寧に育んでいきたいと考えています。そして、私たち教師も、子どもたちとともにそれらを大切にしながら、学び続けていきたいと考えております。